

NDC 日本十進分類法について

佐藤 サチ

NDC とは長い付き合いである。

最初の職場が公共図書館、2度目の職場が大学図書館、つまりはずーっと NDC のお世話になってきたことになる。

まずは大分県立図書館（旧称：大分県立大分図書館）時代のことである。

最初の数年間は門前の小僧状態であったが、資料課整理係（今となっては郷愁を誘うネーミングである）に配属されて NDC との付き合いが本格的に始まった。

まだ手書きカードの時代で、「さあ、書いてごらん」と言われた時の緊張感は今でも記憶している。

目録は既蔵図書のカードでフォームの流用もできたが、分類は継続物以外そのつど判断が必要であり、現在のように新刊書誌データがタイムリーかつお手軽に入手できないため、非常に苦労した。最終的には先輩・上司にお任せするのだが、その方たちも参考になる秘密データベースを持っているわけではなく、やはり NDC と首っ引きであった。

世の中の変化につれ新しいものや新しい概念が出てきて、NDC 新訂 8 版が 1978 年にできた。既蔵図書のカードやラベルに 6 版から 7 版への移行の痕跡があり、その時も係内での細かな検討、課内、他課との調整の後、1980 年に 8 版への移行が決定した。

その後、蔵書目録作成事業が始まりその担当になった。分類目録であるが自館の請求記号の分類順ではなく、「あるべき分類」順、それも 8 版分類という設定である。この時から NDC との格闘が始まった。

分類目録のカードと、参考にすべき目録（当時、冊子で出版されていた国立国会図書館・東京都立図書館・大阪府立図書館の蔵書目録・日本図書館協会選定図書目録等）をつき合わせ異同があれば現物で確認し、あるべき書誌データにする。

参考にする目録も、館によりまた時期により使用 NDC が 6 版から 8 版まであり、単行本とするか、シリーズ物とするかでも分類が異なり、大好きな広辞苑よりも NDC が身近な日々だった。年が経つにつれ、0 門から始まった作業も 1, 2, 3…門と順に進んでいき、NDC も小口の汚れ部分が年々厚くなっていった。この担当は 7 年続き、後任に引き継いだ。

しばらくは NDC と普通の司書の付き合いをしていたが、新館建設・電算導入という話になり、書誌データがらみで電算にもかかわることになった。

NDC との関連では、データ遡及入力業者の選定（方法・品質・価格等）、決定業者の入力データのチェックがあった。文章にすると短いですが、特に後者は件数も多く膨大な作業であった。もちろん多人数で行ったが、またも深い付き合いである。

新館開館後は、電算導入で市販データ利用だが、特に継続物等の扱いでは自館用に修正必要の場合もあり、まれにだがミスデータもあり、オリジナルデータ作成等、NDC との縁は切れない。

以上は内部業務の面からだが、カウンター業務でも NDC は欠かせない。今では OPAC という便利なものがあるけれども NDC は必備だし、その基本的知識がなければ図書館の

仕事はできない。

次に別府大学図書館時代に入る。

2009年3月まで5年間、図書館職員として勤務したが、担当はILLでありカウンター業務とあわせてもデータは使う側で作る側ではなかった。例外的に幼児・児童教育研究センターの絵本のNIIデータへの登録作業を手伝った程度である。NDCとの縁はまあ薄い。

昨年春から、それまで兼務していた司書課程の非常勤講師の専門になった（日本語としておかしい気がするが）。以前に比べて気持ちがゆったりしたせいか、授業内容について感じたことを反芻したりする。NDCについてである。

昔はというべきか、昔からNDCはBSH、NCRと共に図書館員の3種の神器といわれている。

その一つであるNDCについて、その歴史からも大いに敬意をはらっているし、上に書いたように大いに利用しお世話になっている。他の人から何か言われても、「でも、もっと使い勝手の良いものを作ろうたって、自分で一からは絶対にできないよ」と言ってきた。版を重ねるごとにかさばってきているが、中身が親切・丁寧になって分かりやすくなっている。該当しそうな分類の前後をよく見れば、注意すべきことがしっかり表示されている（正確を期すためかたまに難解な文章もあるが）。

以下、分類を教える立場に立っての個人的感想である。

NDCに沿ったテキスト（JLA図書館情報学テキストシリーズII 10 資料組織演習）を使用しており、NDC冒頭の「解説」の「分類の機能」つまり分類の必要性から始める。学生の中には図書館の初心者もいて「ラベルの数字に意味があるなんて知りませんでした」という発言があったりする。

NDCの理論は資料組織概説でも軽く触れているが、資料組織演習では実際に分類作業をするためにテキストどおりくわしく説明をする。

予想外にスムーズにいかないのが「図書内容の把握」である。現物を手にしてではなく、テキストの例題・演習問題で書名・著者名等のわずかな情報のみのためか、内容を把握しにくかったり、複数の解釈が出ることがある。また、読書経験・図書館利用経験の浅い学生であるから無理からぬとは思うのだが、『標準ポーランド会話』を「標準」をキーワードに分類しようとしたり、「プレヒト『三文オペラ』」は関連索引にないため第1次区分の見当さえつかないというケースもある。

図書館員としては、自分の専門以外にも広い知識を得るために、いつもアンテナを張っておくよう伝えることにしている。

使用テキストについて、1つの疑問がある。使用している初版1刷では「文学共通区分の適用法」の項で「言語共通区分と同様に言語記号を共有している個々の文学の場合には付加できない」としているが、NDC本体の418ページの例示「スワヒリ語の小説」のように、付加できると思われる。

1995年に発行されたNDC新訂9版には、「インターネット」も「携帯電話」もないが、1999年刊のBSHには採用されている。NDC第10版が刊行される時（果たして紙資料で出るのかという心配もあるけれど）どんな新項目があり、どんなふうに進化しているのか、今から楽しみにしている。

（さとう・さち 別府大学非常勤講師）